

2020 年 8 月 24 日

報道関係者各位

慶應義塾大学 SFC 研究所

震度計では捉えきれない細かな地震の揺れをシェアする 「精密体感震度」機能の提供を NewsDigest で開始

慶應義塾大学環境情報学部大木聖子准教授が監修した、株式会社 JX 通信社（本社：東京都千代田区、代表取締役 米重克洋）が運営するニュース速報アプリ「NewsDigest」で、震度計では捉えきれない細かな地域ごとの揺れの「体感」を収集・表示する、「精密体感震度」機能の提供が開始されました。

◎ 体感震度とは

自分の体感と実際の震度が少し違うと思った経験はありませんか？ 体感震度とは、人の主観による震度のことです。一方で気象庁から発表される震度は、震度 0～7 までの 10 段階の「震度階級」によって決められます。この震度階級と体感震度の“ズレ”にはいくつかの要因があります。

- 震度計の設置場所があなたのいる場所から離れている
- 震度計の設置場所とあなたのいる場所とで地盤の揺れやすさが違う
- あなたのいる建物が揺れやすい／揺れにくい
- あなた自身が揺れを感じやすい／感じにくい

まばらに設置してある震度計を人の体感震度で補って、より早くより正確に防災情報として役立てようというのが「NewsDigest 精密体感震度」の取り組みです。

【参考】計測震度の算出方法（気象庁ウェブサイト）：

https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/kyoshin/kaisetsu/calc_sindo.htm

◎ 震度計の空白を補う

気象庁などが設置する既存の震度計設置箇所（震度観測点）は全国で 4300 点ほどに限られています。単純に平均すると 1 つの基礎自治体ごとに 2～3 箇所です。震度計の設置場所が所在地から離れていたり、地盤が違ったりすることによって、発表される震度と体感震度にはズレが生じる場合があります。このように、被害状況と震度情報がズレてくると救助の初動の遅れに繋がりがねません。

体感震度を報告・共有することは、震度計の空白を補う情報として活用できると言えます。

◎ 防災への貢献

体感震度報告を行うことは、地盤情報や住宅の耐震性などに自然と意識が向くことに繋がります。

また、被害地震の救助の初動体制にも貢献できると考えています。特に夜間に発生した大地震では翌朝に上空から調査するまで被害状況の全貌が把握できません。そのような時に震源にほど近い地域の人達

から「体感震度 6 弱」といった報告があれば、震源直上の地域ではより大きな被害が生じていると推測することができます。

精密な位置情報と結びつけた体感震度の情報を集めることで、こうした地震被害のリスクを事前に把握し細かく対策できる可能性があります。

こうした取り組みを進めることで、来る南海トラフ地震や首都直下地震などの大地震に備えた防災・減災の取り組みへの応用を目指します。

【大木聖子 環境情報学部准教授コメント】

子供の頃から、ニュースで震度を知ると「いやもっと揺れたでしょ」と思うことがよくありました。大人になって「うちは地盤の悪い地域だったのか」と知りました。だから家具も固定して、備蓄も揃えました。（地震学者にもなりました。）

「もっと揺れたでしょ」「そんなに揺れてないと思う」こういった情報をみんなで共有すると、地盤や建物、自分のことが見えてきます。どれも、防災に役立つ情報です。

より多くの人で共有して、私たちの暮らしている場所について知っていく・知見がたまっていく・意識が変わっていく、その変化を共に感じていけるプラットフォームが実装されました。

ぜひ気軽に（本当にお気軽に！）報告してみてください。

※本プレスリリースは、新聞各社社会部等に配信しております。

【本件についてのお問合せ先】

慶應義塾大学 環境情報学部 大木聖子

Email: soki@sfc.keio.ac.jp

【配信元】

慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当

E-mail: kri-pr@sfc.keio.ac.jp

T E L : 0466-49-3436

F A X : 0466-49-3594